

人間の成長における活動の意味

津守 真

大人が意図をもって導入する活動は、保育においてどのように考えたらよいのだろうか。私はこのことを考えていたとき、ジョン・M・エリックソンの『活動、回復、成長』^(註)という書物に出会った。彼女はオーステン・リッグス・センター (Austen Riggs Center) という精神障害者の施設で、長年仕事をしてきた人である。今世紀の著名な心理学者、エリック・H・エリックソンの夫人で、彼女自身、工芸家である。この書物にはエリック・H・エリックソンのあとがきが付け加えられている。

私共の仕事はいつでも、前の時代から引きついだ途上にあり、同じようなことをしながら、そこに新たな活力を吹きこむことがたえずある課題であると私は考えているが、オーステン・リッグス・センターの場合も同様であった。エリックソン夫妻が着任する以前にも、ここでは伝統的なオキュペーショ

ン（作業）がなされていたが、彼らはそれを活動の概念へと変えたのだった。その過程を次に紹介し、人間の成長における活動の意味を考えたい。この書物では最初にオキュペーション・セラピーの歴史が述べられる。

オキュペーション・セラピー（作業療法）

精神障害者の施設には、今世紀の初頭に、オキュペーション・セラピーという考え方が生まれた。精神病の患者は、何かをする状態をつくることによって、精神の健康を回復するという考えである。その作業に実利的な意味はなくとも、人が心を奪われ（心をオキュバイされ）てすることがあるということが、精神の健康にとって必要だとオキュペーション・セラピーは考えた。そして、そのために種々の手仕事や施設に導入された。

一九〇八年には、シカゴに、精神病院の看護婦のための手仕事遊びのコースを備えた学校がつくられた。一九一〇年には、スーザン・E・トレーシーによって、看護婦のための手仕事のマニュアルが編み込まれ、手仕事を専門とする役割の人をオキュペーション・セラピストとして位置づけた。オキュペーション・セラピーとしての作業は、手芸であれ、陶芸であれ、患者自身のためのものでなければならず、それ以外の目的のためであってはならないと考えられた。心を奪われ没頭する作業があると、人生に対する態度が変わる。そのような作業は、医学的診断とはかかわりなく、本人の能力と興味に従って徐々に作られてゆくものであって、普通の生活にもどつてもつづけられる、個人の人生の一部をなすものである。その指導者に必要なことは、第一に熱意であり、第二に興味をひき出す能

力、第三に工夫力と柔軟性、第四に、仕事をはじめさせる能力である。これらはオキュペーション・セラピーの基本をなす考えであるが、これは丁度同じ時期にはじまった当時の新教育運動を思い起こさせる。所も同じシカゴである。その新教育運動によって幼稚園や小学校が、自由な教育形態を重視すると共に、図画工作や音楽、手技などを教育の内容として取り入れたのであった。オキュペーション・セラピーは障害者の分野で提唱された運動だったが、新教育と同様に、主体である人間を尊重することに於いて、根をひとつにする運動だったと考えてよいだろう。

オキュペーション（作業）から活動へ

第二次世界大戦後も、今日に至るまで、この考えはつづいていて、二十世紀後半になって、人間の成長や発達の研究が目ざましく進歩し、オキュペーションや作業はどのような位置に立つのかが問われるようになった。一九五一年に、オーステン・リッグス・センターに、エリクソン夫妻が着任したとき、彼らは、オキュペーションと成長・発達との中間に、活動 (activity) を考えた。つまり、人がアクティブに、積極的にかかわることによってオキュペーションが意味をもつという考えである。物とかかわり、人とかかわり、また、自分を非活動的にする内なる葛藤とかかわるところに活動がある。

従来のオキュペーション・セラピーとしての作業は、そのときにもあったのだが、オキュペーションという考えだけでは不十分であることをエリクソン夫妻に気付かせたひとつのエピソードがある。それはそのセンターのお祭りのときに起こった。ひとりの少女が次のような歌を歌った。

大きな織機の前に、くる日もくる日も

一日中座って、私は織っている

何をつくっているのか 神さまだけがご存知だ、だれのために織っているのか 神さまだけが知っている。

皆は拍手をし、笑ったが、エリクソン夫人は笑うことはできなかった。

何故、織機の前に一日座って、先生によってあらかじめ決められたデザインを作らねばならないのか。素材についても、機械についても、何も学ばず、親戚のために、いつ果てるとも分からない作業をしなければならぬのか。何故、自分の部屋のカーテンや食堂のテーブルかけを、自分でデザインして織ってはいけぬのか。

施設の中でいろいろの作業がなされていても、それが自分のものになっていない。そのことに自分自身がかわっていない。それをするのが、人間的に成長する力を育てるものとなっていない。この書物の中で次のように書かれている。

「私の夫のエリック・H・エリクソンと私は、新しく着任したばかりだった。彼は青年期の研究を追究しており、リッグス・センターにおける青年のアイデンティティ（同一性）の混乱が、さまざまな症状となってあらわれるのを見ていた。私は彼のアイデアについて議論を交わしていたが、私自身の背景は工芸家としての仕事であった。……」
「率直に言って、この歌が皮肉に語っていたことは、

私が人生の諸段階で大切と考えていたことに触れていた。とくに彼らが新たに自分自身を回復しようとしているときに、こういうことは許せないと感じた。そして尊敬すべきオキュベーション・セラピーが、この私立の小さな病院で、すでに時代遅れのものになってしまっていることにショックを覚えた。……」「そこで私はその施設の慣習や組織については何も知らないのに、大きな熱意をもってこのことに立ち向かったのだ。憤りから発した、抗し難いエネルギーに促されたことであつた。こうして、いろいろの作業が廃棄され、新しい活動が導入された。手芸、陶芸、金工、木工などの「ワークショップ」「美術」「演劇」「ナースリースクール」「園芸」が、主たる活動となつた。

これらの活動にはオキュベーションと違って、次のような特色がある。

○それを行うことが、能力や技能をつけることを目的とするのではなく、その人の中に眠っている能動性にかかわる力を育てるものであること。

○病院や施設の生活に慣らされたために退行し機能しなくなっている、人生に対する肯定的なアイデンティティを回復し、成長させること。

○病院や施設の中で、世話される人としての役割からぬけ出て、一人前の人間としてのプライドをもって立てるようにすること。

○活動は治療効果があるからするのではない。それぞれの活動は、それ自身が専門分野として意味をもつものであり、指導者はセラピストではなく、各専門分野で専門家として自立している人たちである。患者がそのような活動に参加することが、結果として最良の治療効果をもたらす。

人間の成長における活動の意味

このような活動をすることによって、人は成長する。すなわち、活動自体に意味があるのではなく、その中で人が成長することで意味がつけられるのである。

エリク・H・エリクソンは、よく知られているように、人間の生涯の発達を八つの時期に分け、各時期に人が当面する危機を示した。たとえば、第一の時期（乳児期）には、基本的信頼と不信との間の危機がある。これは赤ん坊の母親に対する信頼感の問題だけではない。手仕事をすることに自信を失った人が、教師の助力によって、自分でためし試みる者としての自己信頼を回復することができると。自分にはそんなことはできるはずがないと言って、自己不信の中に逃げこんでしまう方が楽かもしれない。しかし、だれでも、それまで生きてきた自分とは違う新たな可能性を自分の中に発見することができるといふ自信を回復するならば、そこから次の成長がはじまる。信と不信との危機は、活動を通して克服され、人は生命的に生きられるようになる。教師のなすことは、活動によって人が生きるようにすることである。能力や技能は結果として生まれるものである。

第二の時期（幼児前期）には、自律と恥・疑惑との間の危機がある。自分が選択し、自分の意志によって決断する自律性が生じるのが幼児前期である。しかし、自分の行動が大人の期待に沿わないのを認識すると恥ずかしいと感じ、自分で自分をコントロールする能力がないのではないかと自己疑惑が生まれる。そのことが、自分で選択することを困難にする。これは幼児期のことだけではない。大人によって活動のスケジュールがきめられ、命令的になされるところでは、自分で選択する意志は生まれない。まず、活動を自分が選択して参加することが出発点になる。オーステン・リッグス・セ

ンターでも、ある手仕事を患者がはじめるまでに、長い期間迷い、ひとたび自分から始めたときに目覚ましい進歩をした例が数多く報告されている。

第三の時期（幼児後期）には、自発性と罪悪感との間の危機がある。いろいろの素材、道具、技術をためし、それになれてくると、人はそれらを用いて何かを作ろうというプロジェクトを自分でつくり出す。これが自発性（イニシヤティブ）の感覚である。自分は間違ったことを考えているのではないかという罪悪感によって抑制されすぎると、自発性を十分に発揮し展開することが困難になる。幼児後期には、子どもは心の中にいろいろのプロジェクトを展開させ、それが遊びとなり、友だち同士で目的や意図を共有する。その過程の中から、次の時期の有能性（コンピテンス）が生まれる。つまり、互いの競い合いの中で磨かれる力である。活動がそこまでに達すると、専門家が一緒に傍で仕事をしているだけで立派な教師としての役割を果していることになる。

人間の成長はこの後の時期へと更につづくが、別の機会にゆずる。

手仕事の「ワークショップ」の中で、自律性、自発性、創造性が成長する。また、よい文学作品は、人間の葛藤、緊張、危機をはらんでいて、多くの人に訴える力をもっている。その中の役をとることによって、同一性の混乱の中にある青年は、同一性を発見する。これが「演劇」である。また「ナースリースクール」で幼児の葛藤や挫折、その回復する姿に直接ふれることにより、大人もまた自分自身を受けいられるようになり、他人を認めることができるようになる。基本的信頼は、すべての活動の根底にあるが、「園芸」によって人は大地の生産性に参加し、宇宙に対する信頼感が育て

られる。

ここに述べてきた活動は、大人の諸活動であって、時間、空間の面でも、その他の生活の部分から切り離されている。指導者もそれぞれの分野の専門家である。

子どもの保育の場合には、活動と生活とは互いにいりこんでいて切り離せない。子どもは遊びの中でいろいろな活動をするが、それらは時間的、空間的にひとまとまりのものとして考えることがむずかしい。その流動性の中でこそ活動が子どもの成長を助けるものとなっている。大人にも子どもにも共通なことは、活動は単なる作業や課業ではなく、その活動をすることによって人間が成長するという点である。

こう考えてくると、子どもの生活の中に、活動を分化させるのには、時期と方法、指導者の考え方が考慮されねばならないことがわかる。定まった時間に特定の活動を設定すること自体に意味があるのではない。

エリクソンが言うように、「真の教師は、素材の傍に立ち、その性質を生徒に解釈する。それによって生徒は自分自身をあますところなく開き、素材の本質に気付くようになる。生徒がその経験に對して準備ができそれで遊べるようになったら、彼は次に何を必要があるかをたずね、そしてそれを教えてもらうだろう。このような教育はそれ自体が芸術である。」このことは大人にも子どもにもあてはまる。私の学校の子どもが、のりをベトベトにしたり泥をこねたりするのも、これに通じる

ことだと考えながら、私はこれを読んだ。

(愛育養護学校)

(註) Joan M. Erikson : Activity, Recovery, Growth. —The Communal Role of Planned Activities,

Postscript By Erik H. Erikson. W. W. Norton & Co. 1976

